

オランダからの風 パフォーマンスアートによる文化交流 ～モニカ・ヴァン・ケーコフ氏～

千田奈 (EYERise)

パフォーマンスと異文化

パフォーマンスアートは、ダンスや音、舞台環境などで演者が表現したいことを伝えることができる手段の一つとして、今では様々な形で見る機会があります。このパフォーマンスアートは、言葉の壁が取り払われる、という利点があります。

もちろん、言葉というコミュニケーションとして非常にダイレクトな手段を使わないため、演者の技量や構成に左右されるウェイトが大きくなるかわりに、文化の壁を越えて交流を行う場合に適している技法といえます。

日本で活躍するパフォーマンス

今回紹介するモニカ・ヴァン・ケーコフ氏(Monique van Kerkhof; 以下 敬称略)は、オランダで生まれ、モダンダンスを学び、その後スペイン、ニューヨークなどでも活躍したダンスパフォーマンスです。現在は日本で、パフォーマンスを演じながらビデオアートやCGデザイナーとして活動の場を広がっています。このように、彼女は活躍の場として異なる環境であっても、自身が表現したいことを適切なメディア、表現媒体を通じ演じています。近年ではリアルタイムで見てもらう事を前提で行われる、パフォーマンスアートから現在ではビデオアートやCGデザインまでを加えており、ディスプレイなどを通じ間接的に見る、繰り返し見るといったシーンにおける表現まで手がけています。

一説には、感情の表現を伝える場合に55%が顔による表現であり、声の調子による表現は38%、言葉は7%といわれています。(マレービアン・西田司他共訳「非言語コミュニケーション」より) そのため、異文化の中で育っていても言葉の壁を越えてコミュニケーションを行う手段として適切な表現技法がパフォーマンスであり、ビデオアートになるのです。

この模様はNHKでも放映され、多くの観客を魅了しました。モニカさんのコンセプトは生きていることそのものと融和したアートであり、現実を見つめる異なる視点や、アートの根幹にあるものの重要性を強調することであった。日本とオランダという異なる文化の中にあり、今見ている視点も実は多くの日本人とは違った視点を通して、表現されるパフォーマンスは一見の価値があります。



トンネルビジョンにみるオランダの風
トンネルビジョンはモニカさんのパフォーマンス活動の一環として2006年11月18日に埼玉県春日部市の巨大トンネルの放水路で行われました。

広いスペースの中でキャットウォークや持ち込んだプールなどを使い音楽とともにパフォーマンスを演じました。

この模様はNHKでも放映され、多くの観客を魅了しました。

モニカさんのコンセプトは生きていることそのものと融和したアートであり、現実を見つめる異なる視点や、アートの根幹にあるものの重要性を強調することであった。

日本とオランダという異なる文化の中にあり、今見ている視点も実は多くの日本人とは違った視点を通して、表現されるパフォーマンスは一見の価値があります。



プールやキャットウォークを使ったパフォーマンスを演じたモニカさん



異文化コミュニケーションがこれからは必要ですと昔から言われており、言葉を逐一理解していくことばかりに目を奪われがちですが、自

分が伝えたいことを顔の表情や動作、声の調子を通して伝えることの重要性をこのパフォーマンスを通して感じることでしよう。

Monique van Kerkhof
モニカ・ヴァン・ケーコフ

オランダ・ネイメイゲン生まれ。17歳の時「リフテ」でモダンダンスに開眼。アムステルダム市の「グラハム テクニック アンド インプロヴィゼーション」にてダンスを学ぶ。22歳でスペインに渡り、バルセロナの「ラ ファブリカ」で活動を開始。1985年、活動拠点をニューヨークへ移す。「アルビン・ニコライ ダンススクール」と「マース・カニンガム スタジオ」(マース・カニンガム スタジオから奨学金を受け)でさらにモダンダンスを学ぶ。1985年以来、ロフ・アウテンダイクと共同でパフォーマンス、ビデオアート両面で創作活動を行う。1990年来日。株式会社バードランドにてデザイナーとして従事するが、独自のスタジオで、ウェブ・ページ制作を行う。パフォーマンス、ビデオアートの制作発表、CGデザイナーとしても活躍中

Webサイト

<http://www.roboudendijk.com/>

トンネルビジョン

<http://www.roboudendijk.com/index-start.html>